その２　　ふるさと笠岡を詠んだ歌

（１）　笠岡に疎開の時期（昭和二十年一月～終戦）

①長歌　疎開風景

孫たちを疎開せしむと　ひきつれてその父と共に　こがねふく吉備の中国遠けれど
ふるさとさして岡山に　急行汽車を乗り換えて　小夜ふかければ駅員の室に休らひ
久しくも待ちしと思へ　はや汽車の入りしと言ふに　あわてつゝその父を先に
重き荷を背負ひ持ち幼きを引立て　われもやうやく走りゆきしが　その父の姿も見えず
心せき汽車には乗りし　発車してそこにあやしみ　傍らの人より聞きて乗り違ひせしと思へど　この汽車は上り急行姫路まで止まらぬものを　二た時も走りつゞくを　あなやとて驚きさわぎ　人らまたのゝしり言へば　はらわたのよじるゝばかり　悔やめどもせんすべしらに　恨めども寄るべもあらず
幼きが泣くを賺かして菓子をやり脇に抱きて　何時しかも寝入りしものを　覚めぬ間にはやもはやもと既にして明け行く窓に　孫たちの駅ひとつひとつよみつくして姫路へ着きぬ　折よくも下りの汽車のありたるに　たゞに乗換えこのたびは心明るく　さるにても長き旅路を　ふるさとの駅に来ぬれば
はしなくも汽車より下りしその父の姿を認め　孫たちが声を揃へて呼びければ　驚き驚き息つぎてその父曰くあゝいかに心配せしぞ　岡山の駅に戻りて姫路にも電話をかけ　四方八方をたずねもあぐみ
かきみだしうれへつゝ　われもこの汽車に乗りては来しぞ　この同じ汽車にこの汽車に
乗りては来しぞ　うちつれてこの同じ汽車に乗りてふるさとへ

②幼き孫　疎開せしむと　ひきつれて　終りにかへれり　ふるさとへわれは

③いさきとり　海辺の岡の　冬の日の　輝く下にて　海を見るわれは

④笠岡の　岡より見れば　神島や　沖の八十島　四国まで見ゆ

⑤長歌　孫の罹災（岡山市に下宿していた孫固が六月二十九日に罹災）

二十九日の大空襲　わが孫はいかにせしや　無事ならばはやも帰らむ　いくたびか罹災者列車
着きたれど孫は帰らず　気の利かぬ兒にこそあれば　逃げ場をや失ひたるや　運の好き兒てもあれば何かして逃げ抜けゝむか　その母のところへゆきて　あれこれと想ひ語れど　二人して語るに堪えず　わが室にひとり来りて　同じことくりかへすなべ　ひとりにも堪えず

反歌

翌日のひるすぎに孫は　みだしたるさまにもあらずて　帰り来たれり
四方火に囲まれければ　下水溝にとびこみて　その水をかぶり居たりと

⑦長歌　母の釜

疎開荷の中よりいでし　小さなるさびし古窯　たらちねの母が一人居　城山の松の下びの海近きところにありて　朝夕に炊きたうべし　その母の死にたる年に　われははや老いぬるものを　ふたゝびも母のふるさと　いくさをば逃げ来りて　その釜に飯炊きたべむ　米は足らねど

反歌

母の釜は米は足らねど　その母を思ひらひに食うべ足らしめ　ときどきに帰り来りて　うま魚たうべ足らひし　母の釜の飯

⑧吉田村平木にて（笠岡から更に吉田村平木の岡の上にある離れ屋に再疎開、電気設備無し　昭和二十年七月）

・ともし火の　下に親しむ　時にして　ともし火の無き　室に居りかねつ
・山里は　夏も涼しと　おもひきや　あつさも暑し　住めばあはれに
・小山田を　平木の里の　家路には　ほたるちらちら　星空に飛ぶ
・きりぎりす　鳴くや片山　細道を　通ひ馴れるも　馴るゝ住居か

（２）終戦後の混乱期（昭和二十年～二十二年　吉田村から笠岡に二十年十一月転居）

①日本降伏

・昼暑く　裸にならで　堪へがたし　國は敗れて　人いきてあり
・三千年の　歴史空しく　降伏の　國に生きつゝ　秋立ちにけり

②長歌　贈　石川暮人君（息子が戦死した友人に贈る）

焼跡にい立ちいまして國の仇　民の怨みをはらすべき　時到れりと
いとし子を出で征かしまし　君が歌よめばわが胸断ち焚く如し

③長歌　民飢ゑむとす

國敗れ民飢ゑむとも　まつりごとかしこみまおす　もろもろの大臣
つかさだちいそぎてはやく　はかりごとそこに立ておき　此の民を
救はざりせば　何をもて大御心を行ひまつらむ

④長歌　上　玉堂先生（吉田村での唯一の楽しみは玉堂との書簡交換）

畫のひじり玉堂先生　畫のいとま歌よみ楽しみ　よむ歌をわれに示され
その歌に畫をさへ添へて　めづらしく麗しければ　山住みの語る人なく
村住みの行く処無み　つれづれとあらくも知らに　先生の文待ち受けて
披き読み眺め耽れば　多摩川の臺（うてな）の上に　取り上げし魚は食はね
泡立てる麦酒は飲まね　われも楽しゑ

⑤川合玉堂への書簡の一部（昭和二十年九月二十日）

何もかも失へる日本に藝術は彼等も奪ふこと能はず、敗戦の堕落より我國家を救ふものは実に藝術の使命と存候。彼等をして尚帝国の前に頭を下げしむるものありとせば、先生の藝術の如きものを措いては他に求むべからず、先生は実に國の威厳を代表せらるべきかと存じ候。

⑥長歌　大晦日と新年（吉田村から笠岡に帰居）

十日ばかり冬至を過ぎて　日の長くなりしと思ふ大晦日かも　ほのぼのと御空は匂ひ
暮れゆくやこの災ひの年の終りは　ゆく年はこの年とても惜しまむれ
ふたたび来よと願はざれども

⑦城山を　少し掛けたる　初空のほのぼの明けて　硝子戸に見ゆ
⑧見渡せば　四方のさくらの　咲き始めて　敗れし春も　おろそかならず
⑨高島や　沖の白石　雨晴れて　北木の島に　霧立ちのぼる

（３）東京駒込時代（昭和二十三年以降）

昭和二十三年以降は東京駒込に本拠を置き、笠岡居住（神の島に別宅）の妹岡本章子の生存中（昭和四十年死去）は夏季数か月、没後は任意に笠岡を訪れていた。笠岡を詠んだ歌の中では大好きだった古城山公園（通称城山）と神の島の歌が多い。

①城山

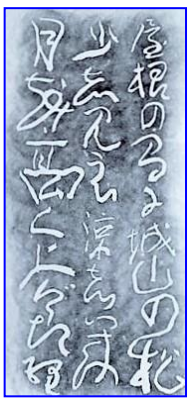
・わが里の　古城やまの　夏萩は　こぼれて咲きぬ　松の木の間に
・城やまの　夏の萩はや　さきてあり　わが友もまた　それをいひけり
・山に居る　黄蝶がひとつ　くゞり飛ぶ　松の下べの　朝のみどりを
・城山の　九月の朝を　一茎の　露草の花　手折りていはむ
・城山の　東の側のなだら畑　けしきよろしく　さゝげ花咲く
・城山の　東細道　うねりつゝ　海より立てる　霧に漂ふ

・城山ゆ　見下す海を 群れつゝも　光りて低く　わたる鳥あり
・城山の　さくらの下に　ひらけたる　海はまさおき　空の色なり
・城山の　みちの雑草　うつくしく　秋に揃ひて　蓼の花も露草も
・城山に　ひとり上りて　秋風の　松の木の間の　海を見わたす
・城やまの　松の下海　ゆるゆると　舟こぎゆける　海人をとめかも
・老松の　下に来れば　腰下し　一休みする　ことゝするかも
・城山の　老松が根に　腰かけて　しばらく休み　立上るなり
・老松の　大木が横に　さへぎれる　波平らけき　海のながめなり
・夜ふりし　雨の洗へる　城山の　松の下路　朝たにのぼる
・城山の　孤つ老猿　さびしさに　泣くことさへも　知らぬやうなり
・山の上の　一つ老松　誰を待つ　年々に来て　われは見にけり（老松　左）

・城山の
上の広場に
たゞ射せる
朝日より見る
海のある町
（古城山歌碑　右）

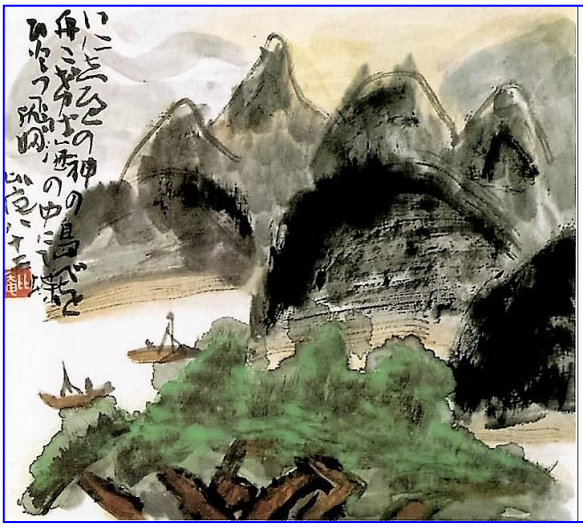
・ひさしくも　見ざりし海を　ふるさとの　かゞみのごとき　海を見はらす

・屋根の間に　城山の松　少し見え　涼しき月を　高く上たり（威徳寺歌碑）



②神の島

・朝夕は　寒きほどなる　島に来て　昼の暑さを　堪へがてに居る
・神の島　夏の盛りの　家近く　はたおり鳴きて　海しずかなり
・神の島　寺間の磯の　昼たけて　一つ鳴く虫　ひとりきくかも
・神の島　寺間の磯ゆ　見はるかす　天ひろびろと　夕焼けて海に
・神の島　海平けく　秋暮るゝ　むかうに灯る　笠岡の町
・神の島　寺間の浦の　石蕗は　いたるところに　咲きて冬なり
　・去年粟を　植ゑしはたけに　今年また　粟をを植ゑたる島に来りつ
・垣の外　ながれてほそく　山水の　おとのさやけく　秋の海に入る
・雲垂れて　山際ばかり　金色に　燃ゆる方より　風強く吹く
・いにしゑの　神の島べを　舟こげば　海の中にて　蝶一つ飛ぶ



神の島
いにしゑの 神の島べを 舟こげば
海の中にて 蝶ひとつ飛ぶ　比庵八十二

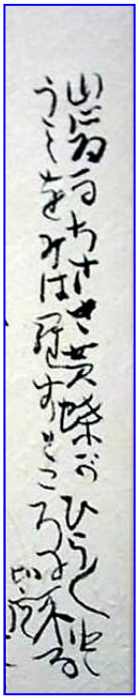
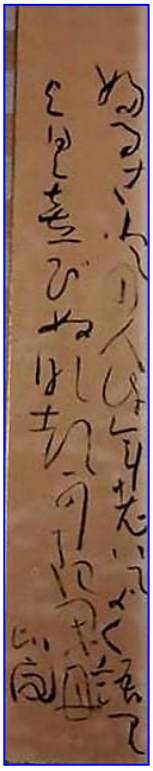
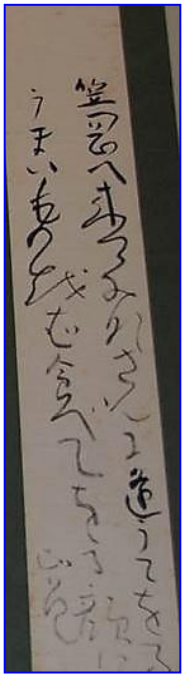
・**長歌　島の女**

山畑の草をとりつゝたかだかと　隣の畑と語り合う島の女の平けきその日その日の安らけき彼家此家のさまざまの　よしなしごとの美しき声のまにまに山鳩は松の林に頬白は森のこずゑにさへずり交す　　比庵　（昭和二十七年　七十歳）

山畑（島の女）
山畑の草をとりつゝたかだかと 隣りの畑とかたりあふ
島の女の平らけき その日その日の安らけき 彼家此家の
さまざまの よしなしごとの美しき 聲のまにまに山鳩は
松の林に頬白は 森のこずゑにさへづりかはす　比庵

③その他

・笠岡の　松山肌を　赤く染め　海よりさせる　夕日も秋に
・ふるさとの　瀬戸の海の　大桜鯛　たべてゐばりて　われはあるかも
・古里の　笠岡にゐて　君にあひぬ　歌碑を見てもらひ　無花果もたべてもらふ
・大君の　笠岡の山の　いたゞきの　松に寄り咲く　萩の花かも
・父母の　墓にまゐれば　冬ながら　あたゝかにして　海も見ゆるに
・笠岡に　来てみなさんに　逢うてをる
　　うまいものをば　食べてをる顔に（右　短冊）
・ふるさとの　人は年老いて　よく語り
　　よく喜びぬ　なつかしきかも（中　短冊）
・山にゐる　ちさき黄蝶が　ひらひらと
　　うみをみはらす　ところに来る（左　短冊）

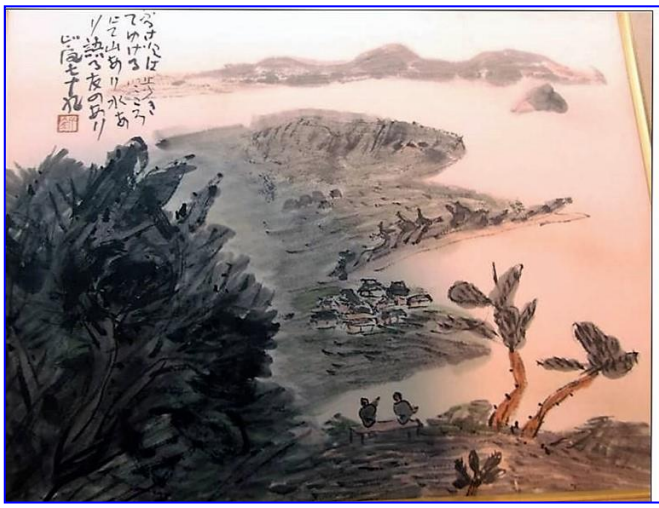




・墓碑（威徳寺）
まどかなる　夢をむすぶと　いふことの
　いかにまどけき　ものにあるかも（左　比庵夫妻墓碑）
あたゝかき　人にかこまれ　惜しまれて
　且つ仰がれて　しあはせにねむる（右　妹章子の墓碑）

・歌碑（(中央図書館）
柳はみどり　花はくれなゐ　食べ物は天ぷら糸づくりは酒はのまねど　八十八叟比庵

城山

城山ゆ みおろす海を むれ(群れ)つゝも
ひかりてひくゝ わたる鳥あり 比庵



ふるさとは 歩きてゆける ところにて
山あり水あり 語る友のあり 比庵七十九

笠岡のお茶のあそび

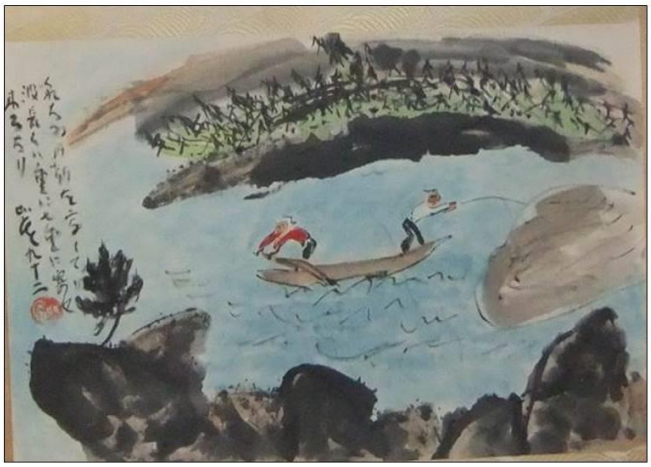
笠岡の 青池のうゑの 松原の
お茶のあそびを すれどたのしも 比庵

城山

城山ゆ みおろす海を むれ(群れ)つゝも
ひかりてひくゝ わたる鳥あり 比庵

ふるさとのつゝじ

つゝじ咲く ふるさとの山 そのむかし 上りしまゝに 路のあるかも 比庵八十七



投網

くれなゐに 朝を写して 波高く
八重に七重に 寄せ来るなり 比庵九十二